

研究課題：「ふれあい・いきいきサロン活動の評価研究」

代表研究者：坂本 俊彦（山口県立大学

附属地域共生センター准教授）

1. 研究の目的

本研究の目的は、「ふれあい・いきいきサロン」（以下「サロン」と略す）活動が、参加者や地域社会にどのような効用を持つものであり、その課題や対策がどのようなものであるのかを明らかにすることにある。特に下記の2点に焦点を当て明らかにする。

- ①サロン活動が、参加者や担い手・地域社会に与える効用
- ②サロン活動を、継続するうえでの課題と対策

2. 予備研究（第1年度）

第1年度は、第2年度に実施する本調査の準備段階として、先行研究の収集・整理とサロン関係者に対する聞き取り調査を実施し、その結果を踏まえ、ふれあい・いきいきサロン活動評価指標を作成した。参加者に関する指標としては、①身体的効果：「健康に対する気配りが高まる」、「身体を動かす習慣が身につく」、「食事・栄養への気配りが高まる」、②精神的効果：「生活にリズムが生まれる」、「生きがいを感じる機会が増える」、「孤独感が和らぐ」、③社会的効果：「仲間づくりの場となる」、「外出の機会が増える」、「異世代との交流の機会となる」を設定した。また、担い手に関する指標としては、「充実感や有用感を感じる機会となる」、「健康に関する意識が高まる」、「老後の安心感を得る」、地域社会に関する指標としては、「高齢者の生活課題を知る機会となる」、「地域の福祉課題に取り組む意欲が高まる」、「地域の福祉課題に取り組む機会が増える」を設定した。

3. 本研究の方法（第2年度）

(1) 調査票の作成

サロン活動評価指標をもとに、代表者用、担い手用、参加者用の調査票を作成した。

(2) 調査対象

調査対象は山口市及び美東町で活動している計73サロンに所属する代表者、担い手及び参加者とした。

	対 象	配布数	回収数	回収率	備 考
山口市 (53 サロン)	代表者	53	53	100.0%	※今回の調査では、「交流会」「研修会」に参加したサロンのみを調査対象とした。
	担い手	252	216	85.7%	
	参加者	816	597	73.2%	
美東町 (20 サロン)	代表者	20	20	100.0%	
	担い手	137	116	84.7%	
	参加者	208	170	81.7%	

(3) 調査票の配布・回収方法

調査は平成19年3月～6月に行った。調査票の配布は、「サロンリーダー交流会」において、サロンの代表者に対して調査協力と調査票配布を依頼し、サロン開催時に代表者から担い手及び参加者に手渡した。調査票の回収は返信用封筒を用い対象者から「サロン活動評価研究会」（山口県立大学）へ郵送した。

4. 研究の結果

(1) 参加者に対する効果

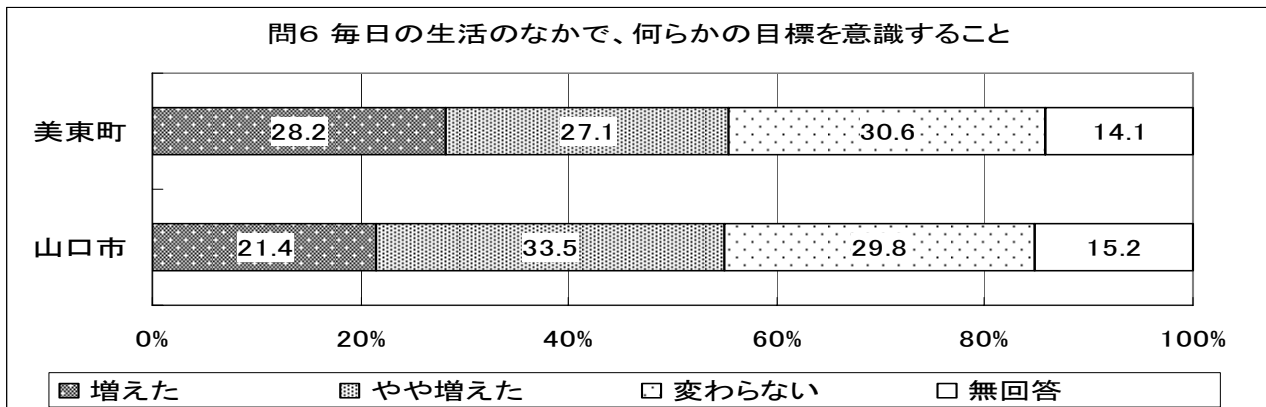
1) 身体的効果

参加者対象調査では、健康管理に関する8項目について、意識変化を尋ねた。そのうち「健康維持に関心を持つ」(山口市:71.7%、美東町:69.4%)、「軽い運動を心がける」(山:75.0%、美:77.7%)、「栄養バランスに気を配る」(山:71.5%、美:75.3%)、「睡眠をきちんととる」(山:60.9%、美:70.6%)、「規則正しい生活を心がける」(山:63.8%、美:74.1%)の5項目に関しては、「気をつけるようになった」「少しは気をつけるようになった」をあわせると、いずれも6割から7割に達している。

以上の結果から、サロンへの参加が、健康意識を高める効果を持っていると言える。サロンでは健康についての話題がよく出ること、保健師による健康相談が定期的に実施されていることなどがその理由と推測される。

2) 精神的効果

参加者対象調査では、心の健康に関する8項目について、意識変化を尋ねた。そのうち「身だしなみに気を配る」(山口市:61.9%、美東町:70.6%)、「生活目標を意識する」(山:54.9%、美:55.3%)、「普段の生活で笑う」(山:49.0%、美:55.3%)、「生きがいを感じる」(山:49.9%、美:53.5%)の4項目に関しては、「増えた」「やや増えた」をあわせると、ほぼ5割以上となっている。



以上の結果から、サロンへの参加が、心にハリを持たせ、生きる意欲を高める効果を持っていると言える。サロンにおける交流は、参加者に、サロンという場を介して多くの仲間と繋がっているという意識を持たせ、仲間に恥ずかしくない生き方をしたいという想いを強めさせているものと推測される。

3) 社会的効果

参加者対象調査では、社会参加に関する5項目について、意欲変化と行動変化を尋ねた。そのうち行動変化について「増えた」「やや増えた」をあわせると、「近所の人との交流」(山口市:54.5%、美東町:54.1%)、「新しい友人との交流」(山:53.6%、美:52.4%)、「外出行動」(山:49.7%、美:43.0%)、「若い世代との交流」(山:35.1%、美:38.2%)、「(サロン以外の)グループ活動参加」(山:34.1%、美:28.2%)となっている。

以上の結果から、サロンへの参加が人間関係を広げ、社会参加の機会を拡大する効果を持っていると言える。サロンの多くが自治会・町内会レベルの小地域で展開されているため、サロン以外の場においても、参加者どうしの交流機会が増えているものと推測される。

(2) 担い手・地域社会に対する効果

1) 担い手の日常生活における変化

担い手対象調査では、担い手自身の日常生活における変化に関する7項目について尋ね（多重回答）、次の結果を得た。「高齢者の方とよく話すようになった」（山口市：64.4%、美東町：56.9%）、「地域や社会の役に立ててうれしい」（山：59.7%、美：59.5%）、「サロンにかかわれてうれしい」（山：57.4%、美：54.3%）、「友人や仲間が増えた」（山：53.2%、美：37.1%）、「近所づきあいが増えた」（山：45.8%、美：31.0%）、「健康に対する意識が高まった」（山：45.8%、美：37.1%）、「自分の老後に安心感を得ることができた」（山：13.0%、美：12.9%）となっている。

以上の結果から、サロン活動への参加は、高齢者とのコミュニケーションの機会や、友人や仲間、近所づきあいが増える、健康に対する意識が高まる、といった効果を持っていると言える。その効果は、相対的に人間関係が疎であると考えられる都市部において、とくに高く現れている。

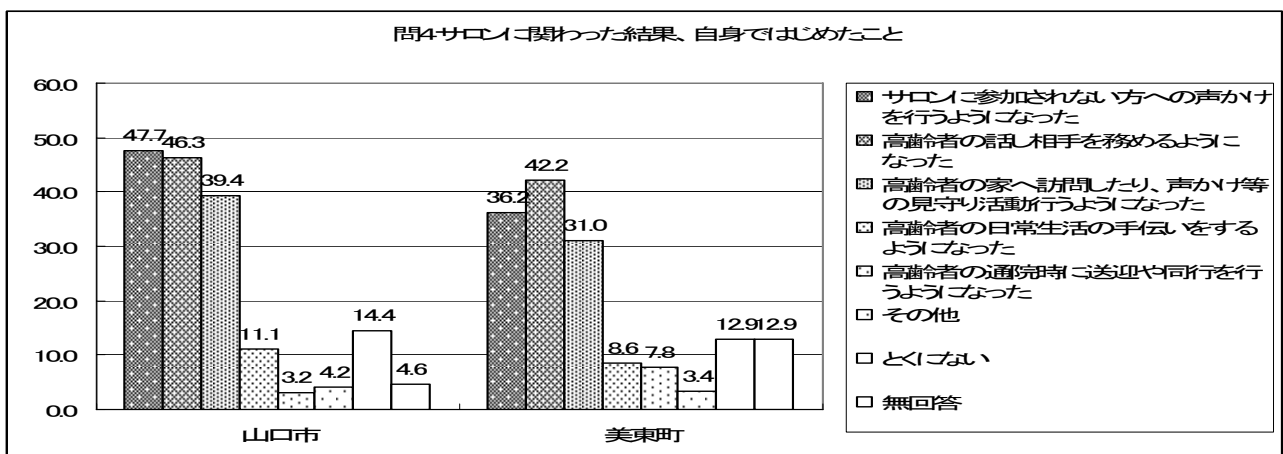
2) 担い手の地域課題に対する意識変化

担い手対象調査では、地域課題に対する意識変化に関する3項目について尋ね（多重回答）、次の結果を得た。「サロン活動が地域で必要であると実感した」（山口市：69.0%、美東町：59.5%）、「高齢者が生活する上でどんなことに困っているかがわかった」（山：29.6%、美：31.9%）、「地域の福祉課題の解決に取り組む必要があると感じるようになった」（山：37.0%、美：25.9%）となっている。

以上の結果から、サロン活動への参加は、高齢者の生活課題や地域の福祉課題を学び、その解決のために行動を起こす必要があると認識させる効果を持つと言える。

3) 担い手による地域課題解決の取り組み

担い手対象調査では、サロン参加後の行動変化に関する5項目について尋ね（多重回答）、次の結果を得た。「不参加高齢者に対する声かけ」（山口市：47.7%、美東町：36.2%）、「高齢者の話し相手を務めるようになった」（山：46.3%、美：42.2%）、「高齢者の家へ訪問したり、声かけ等の見守り活動を行うようになった」（山：39.4%、美：31.0%）、「高齢者の日常生活の手伝いをするようになった」（山：11.1%、美：8.6%）、「高齢者の通院時に送迎や同行を行うようになった」（山：3.2%、美：7.8%）となっている。



以上の結果から、サロン活動への参加は、サロン活動の枠を超えて自発的な地域福祉活動を始める契機となっている。ここにサロン活動の地域社会に対する効果を確認することができる。

(3) サロン活動を継続するうえでの課題と対策

1) 担い手の発掘と確保

担い手を確保するためには、①担い手の広報力（口コミによる伝達力）を高める、②福祉員、自治会役員の参加など制度的な後継者育成の仕組みをつくる、③50歳代の主婦層、60歳代の退職男性の参加を促す、等の取り組みが必要である。

2) 参加者の発掘と継続的な参加の促進

参加者の発掘と継続的な参加を図るためには、①参加者候補のニーズを把握する／開放的なイメージをつくる、②活動内容別に集まりを持つ／新たなサロンを立ち上げる・分離する、③男性への誘いは活動目的と期待する役割内容を明確にする、等の工夫が必要である。

3) 活動内容・プログラムの充実

活動内容の充実のためには、①参加者のニーズや特技を把握し活動の魅力を維持する、②サロン研修会等でレク・プログラムを学ぶ／サロン間での情報交換を行う、③専門家の支援を受ける／健康づくり・介護予防に関する研修会に参加する、等の工夫が必要である。

4) 地域住民との連携・協力体制づくり

地域住民との協力体制づくりのためには、①地域広報誌の活用や地域祭りへの参加を通して、地域住民の認知度を高める、②活動状況と期待する支援内容を定期的に伝え、地域団体や専門機関との協力体制を整える、等の取り組みが必要である。

5. 展望と期待

1) 健康づくり・介護予防活動の拠点へ

一般に、高齢期には、健康づくりや介護予防に対する関心が高まる。サロン活動は、閉じこもり予防としての効果を持ち、また部分的には認知症予防にも繋がる活動であるが、参加者のニーズを上手に吸い上げることで、さらに転倒予防や低栄養状態の予防等の取組を展開する素地がある。

2) 地域福祉活動の拠点へ

サロンに参加することで生活状況に一定の改善がみられる可能性がある高齢者は数多くいるが、その高齢者のすべてがサロンに参加しているわけではない。このことは、サロン関係者や民生委員、社協のワーカー等から多く指摘されている課題である。そこで、生活課題を抱える高齢者の自宅を訪問し、見守り活動等を通して生活を支援するとともに、サロン活動と接点を持たせるよう努める、という取組への発展が期待される。

3) 通代的な地域交流の拠点へ

今回研究対象としたのは、高齢者を対象としたサロンであったが、関係者からは、若い世代との交流機会を増やしたいという希望も多かった。登録参加者に年齢制限を設けず、また登録参加者に限らず地域住民のすべてが参加可能なイベントを定期的実施しているサロンもある。地域社会再生の取組の一環として、サロンが、高齢者に限らず、地域住民の交流の場として発展することも期待される。

4) 行政・専門機関は、住民の自治能力向上のため、サロン支援を適切に行うべき

サロン活動は、地域住民を主体とした、地域課題解決のための取組である。行政及び専門機関は、サロン活動の住民自治活動としての性格を十分に理解し、住民の自治能力向上に資するものとして、適切な支援を行っていくべきである。